

# 底田(3)遺跡

—東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書—

2001年1月

青森県教育委員会



# 底 田 (3) 遺 跡

—東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書—

2001年1月

青森県教育委員会



# 序

天間林村にある底田(3)遺跡は、東北新幹線建設事業の実施に伴い、平成11年度に当センターによって発掘調査が行われました。当センターが天間林村内で行うはじめての発掘調査で、調査区からは縄文時代の土坑や土器・石器のほかに、10世紀以前の平安時代中ごろとみられる建物の柱穴などの遺構も発見されました。この報告書はその調査成果をまとめたものです。

従来、天間林村内では、東部の小川原湖に近い樅林地区が調査対象とされてきました。そのなかで、とくにニツツ森貝塚は、地表に貝殻が多数散布しているため明治年間から人々の注目を集め、学会誌にその調査成果がたびたび紹介されてきました。この貝塚は、本県最大規模の縄文時代の貝塚であり、現在国史跡に指定されております。

これに対して、八甲田山系に近い西部地区では、まったく調査が行われておらず、調査の空白地域がありました。このため、今回の底田(3)遺跡の調査は、この西部地区におけるはじめての調査になります。調査によって、この地域にも縄文時代や古代の人々の生活の痕跡が確認されました。

この報告書が、この地区のみならず天間林村、さらには上北地方の歴史研究や文化財保護に活用されることを期待いたします。

最後になりましたが、この調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、あつく感謝申しあげます。

平成13年1月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫



## 例　　言

- 1 本報告書は、東北新幹線建設事業に伴い平成11年度に実施した上北郡天間林村底田(3)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この遺跡は、県遺跡番号49039として登録されている。
- 3 本書の編集執筆は、野村信生が行ったが、一部は調査第二課の杉野森淳子の協力を得て行った。
- 4 本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、国土地理院発行の5万分の1地形図を7万5千分の1に縮小したものである。
- 5 掘団の縮尺は、図ごとにスケールを付した。
- 6 遺物写真的縮尺は表示してあるもの以外は不統一である。
- 7 堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。  
粒状のもの  
「粒」=粒径2mm以下のもの、「中粒」=2~5mm程度のもの、「大粒」=5~10mm程度のもの  
塊状のもの  
「小塊」=塊径10mm以下のもの、「中塊」=10~20mm程度のもの、「大塊」=20~50mm程度のもの
- 8 本稿で使用した遺構の略号は土坑はSK、掘立柱建物跡はSB、柱穴はPitとした。
- 9 引用文献については、第4章の後に収めた。
- 10 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、の方々から御教示、御指導をいただいた。（敬称略）  
小山彦逸 甲田美喜雄



# 目 次

序  
例 言  
目 次

挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 発掘調査の概要.....	1
第1節 調査要項.....	1
第2節 調査の方法.....	2
第3節 調査の経過.....	2
第2章 立地と周辺の遺跡.....	4
第3章 遺構と遺物.....	7
第1節 概要.....	7
第2節 検出遺構.....	7
第3節 出土遺物.....	8
遺構外出土遺物.....	8
土器.....	8
石器.....	9
第4章 まとめ.....	20

参考文献  
写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

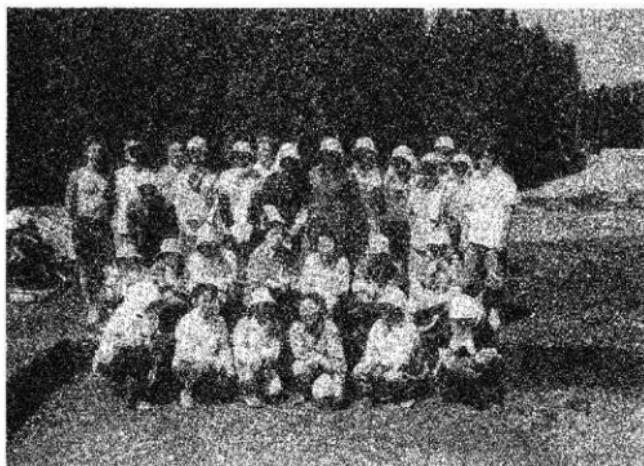
図 1 調査区及び地形図.....	3	図 7 遺構外出土土器.....	13
図 2 基本層序.....	4	図 8 遺構外出土土器.....	14
図 3 遺跡位置図.....	5	図 9 遺構外出土土器.....	15
図 4 遺構配置図.....	6	図 10 遺構外出土石器.....	16
図 5 土坑（SK 1～4）.....	11	図 11 遺構外出土石器.....	17
図 6 第1号掘立柱建物跡.....	12		

## 表 目 次

表 1 遺構外出土土器.....	18	表 2 遺構外出土石器.....	19
------------------	----	------------------	----

## 写真図版目次

写真 1 .....	21	写真 3 .....	23
写真 2 .....	22	写真 4 .....	24



# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

天間林村における東北新幹線建設事業の実施に先立ち、事業区域に所在する底田(3)遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施し、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間

平成11年7月1日から平成11年7月30日まで

### 3 遺跡名及び所在地

底田(3)遺跡（県遺跡番号49039）

上北郡天間林村大字天間館字底田地内

### 4 調査対象面積

3,400m<sup>2</sup>

### 5 調査委託者

日本鉄道建設公団

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関

天間林村教育委員会

### 9 調査体制

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査員 松山 力 八戸市文化財審議委員（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫

次長 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫

調査第二課長 福田 友之

文化財保護主事 野村 信生

調査補助員 川村 真史 工藤かおり 小島由記子

## 第2節 調査の方法

平成11年5月に、県教育委員会文化課が行った試掘調査により、遺構・遺物が検出された箇所を中心にしてトレンチを設定して行った。

グリッドは平面直角座標系に基づいた4mメッシュの方眼とした。X=82572、Y=23216を基点とし、北から南に向けて4mごとに二桁のアルファベットを配した。西から東に向けて4mごとに算用数字を配した。アルファベットはAからZまでを繰り返し、1巡目のアルファベットの前にはAを2巡目のアルファベットの前にはBを付けた。北から南に向けてAA・AB…AY・AZ・BA・BB…BY・BZと設定した。算用数字は西から東に向けて1・2・3…36・37・38と設定した。

遺構検出は隨時行い、発見順に遺構名を付し、原則として1/20で実測図を作成した。遺構以外の出土遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。調査にあたっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については上層から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付した。但し、基本層序については調査前に表土を除去したため、表土の下位をI層とした。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、モノクローム、カラーネガの各種類のフィルムを使用した。

## 第3節 調査の経過

調査は平成11年7月1日から開始した。調査地点は2箇所あり、便宜的に北側をA区、南側をB区と設定した。北側から工事に着手するため、A区から調査を開始した。AG3グリッドからピットが検出されたためグリッド単位で拡張し、遺構の広がりを確認した。A区の調査は7月9日に終了した。この後、7月12日からB区の調査を開始した。適所にトレンチを設定して調査を行った結果、AZ24・BA24から土坑が検出された。このため周辺を拡張したが、遺構の広がりは確認できなかった。7月下旬には調査がほぼ終了し、7月30日に撤収した。

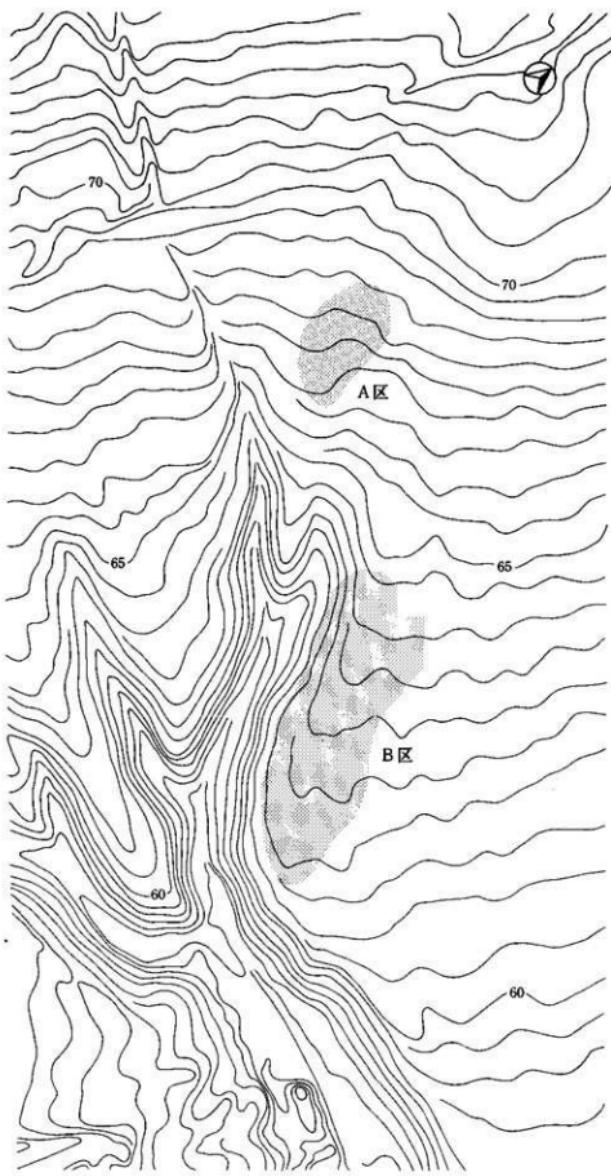


図1 調査区及び地形図 (1 : 1,500)

## 第2章 立地と周辺の遺跡

### 第1節 立地と周辺の遺跡

底田(3)遺跡は八甲田連峰の東方、東岳山地の麓にあり、市渡川右岸の標高約62~68mの舌状台地先端に立地している。遺跡内の土層は、ほぼ平坦に堆積しており、I層には十和田a火山灰がまばらにみられる。II層からは縄文時代後・晩期の土器が出土している。

天間林村内の遺跡は、1998年3月刊行の青森県遺跡地図には38箇所登録されている。村内を流れる坪川と中野川は高瀬川（七戸川）に合流し、小川原湖に注いでおり、小川原湖の周辺には遺跡が密集している。また東北町を流れる赤川、七戸町を流れる高瀬川周辺にも多数の遺跡が所在する。坪川・中野川の河川流域では、確認されている遺跡は少ないようである。当遺跡の東側10.5km、高瀬川河口から4.5kmの地点にニッ森貝塚が所在する。この貝塚は縄文前・中期を中心とする県内最大の貝塚である。東西700m、南北200mに及び、東地区のほぼ全域は国史跡に指定されている。この貝塚はかつて櫻林貝塚と呼称されており、中期後半の土器型式である桜林式の標式遺跡でもある。

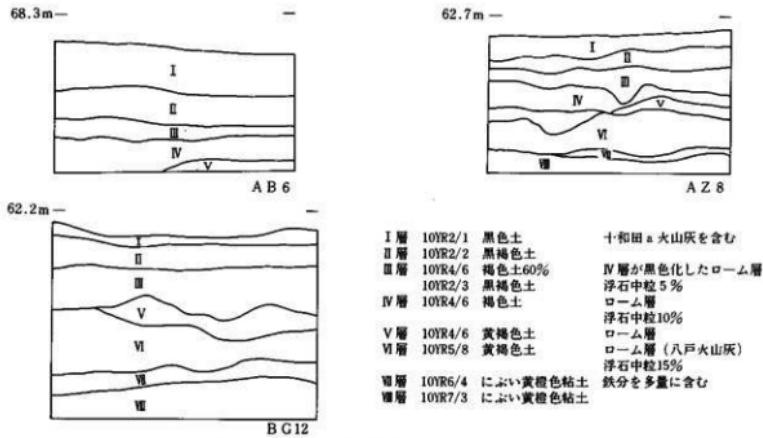
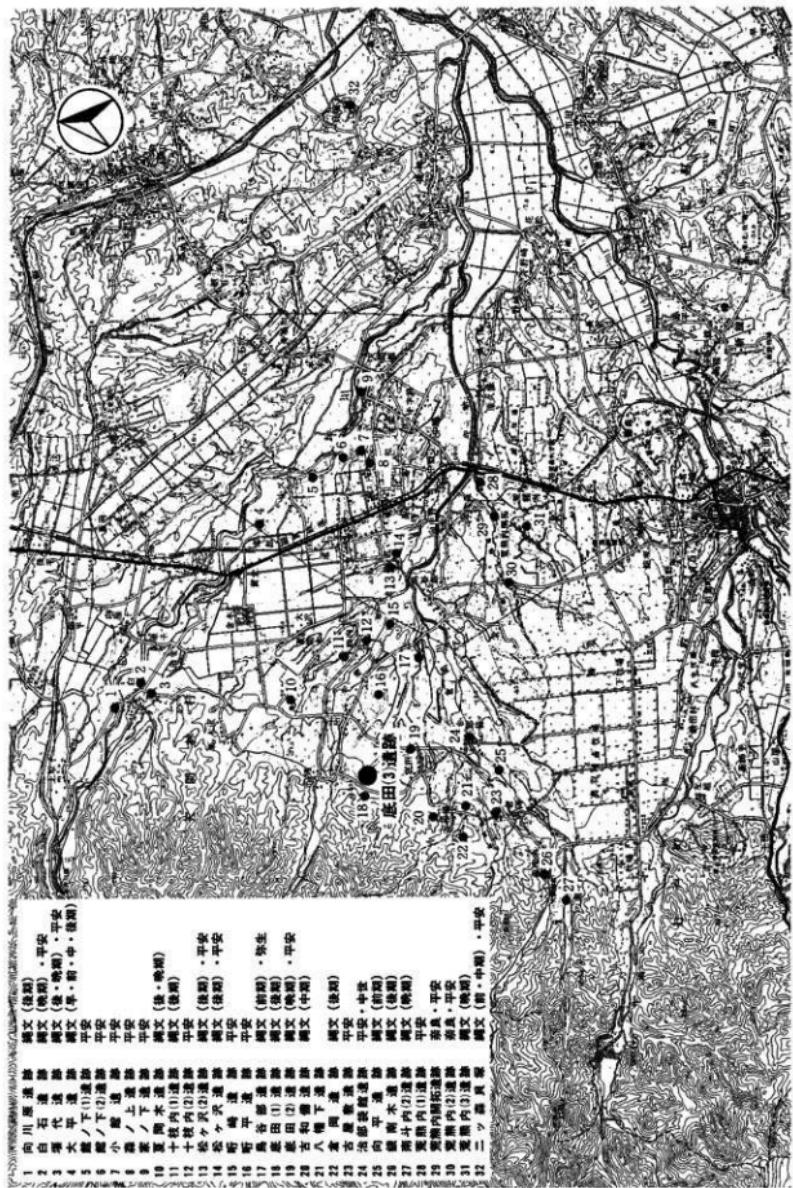


図2 基本層序 (1:40)



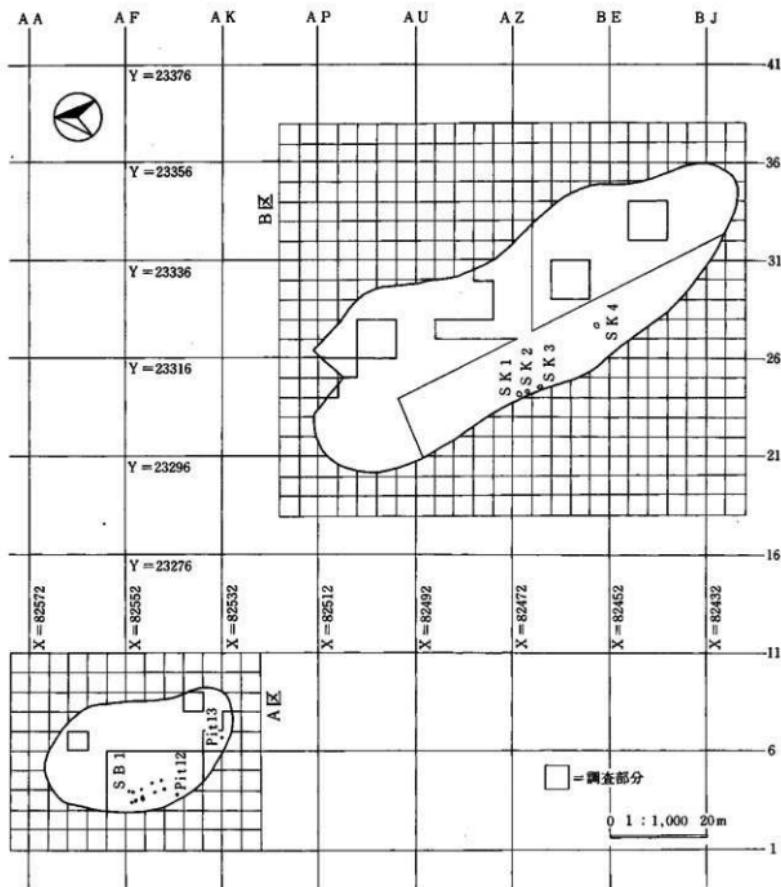


図4 遺構配置図

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 概要

底田(3)遺跡で確認された遺構は、土坑4基、掘立柱建物跡1基、柱穴2基である。共伴する遺物がないため明確な時期は不明であるが、平安時代（915年）に降下したとされる十和田a火山灰降下以前に構築されることから、それ以前と考えられる。Ⅱ層から縄文時代後・晩期の遺物が出土した。土器は器形の全体を把握できる資料はなく、破片資料のみが少量出土した。石器は石窓、スクレイバー、二次調整剝片、使用痕のある剝片、敲磨器、石皿・台石類、剝片等が出土した。その他に、円盤状土製品・ミニチュア土器・土製耳栓が出土した。

本遺跡出土遺構は、土坑をS K、掘立柱建物跡をS B、柱穴をPitと表記とした。

### 第2節 検出遺構

#### 第1号土坑（図5）

- [位 置] A Z24グリッドで確認した。確認面の標高は62.16mである。
- [平面形] 円形である。
- [断面形] フラスコ状である。
- [規 模] 長軸107×短軸95×深さ37cmである。
- [堆積土] 人為堆積と考えられる。
- [時 期] 周辺の出土遺物と形態により縄文時代と考えられる。

#### 第2号土坑（図5）

- [位 置] A Z24グリッドで確認した。確認面の標高は62.16mである。
- [平面形] 円形である。
- [断面形] 盔形である。
- [規 模] 長軸86×短軸80×深さ9cmである。
- [堆積土] 人為堆積と考えられる。
- [時 期] 周辺の出土遺物と堆積状況から縄文時代と考えられる。

#### 第3号土坑（図5）

- [位 置] B A24グリッドで確認した。確認面の標高は62.09mである。
- [平面形] 橫円形である。
- [断面形] 盔形である。
- [規 模] 長軸81×短軸59×深さ15cmである。
- [堆積土] 自然堆積と考えられる。

[時 期] 堆積状況から10世紀初頭以前と考えられる。

#### 第4号土坑（図5）

[位 置] B D 28グリッドで確認した。確認面の標高は61.80mである。

[平面形] 構円形である。

[断面形] 梶形である。

[規 模] 長軸70×短軸52×深さ31cmである。

[堆積土] 自然堆積と考えられる。

[時 期] 堆積状況から10世紀初頭以前と考えられる。

#### 第1号掘立柱建物跡（図6）

A F 3、A G 3・4、A H 4グリッドで確認した。検出はIV層上面で行ったが、I層中から掘り込みが確認できた。確認面の標高は66.56~66.94mである。南北方向が3間、東西方向が1間の建物跡で、平面形は長方形である。柱間寸法にはばらつきがあり、南北方向柱列では174~210cm、東西方向では150~180cmである。Pit 3・4・8は拡張しており、3は40cm、4・8は50cm拡張している。この拡張により南北方向は190~230cm、東西方向は170~190cmとなった。平安時代（915年）に降下したとされる十和田a火山灰の下位から検出されたことから、それ以前の掘立柱建物跡と考えられる。

### 第3節 出土遺物

#### 遺構外出土遺物

##### 土器（図7～9）

土器の出土は少量で、器形を確認できるものはなく、破片資料のみの出土である。遺構に伴う出土ではなく、全て遺構外からの出土である。器種は壺・皿・鉢（台付）・浅鉢（台付）・深鉢である。但し、鉢（台付）・浅鉢（台付）・深鉢は破片資料であるため、その区分は不明確である。土器は時期により第I群～第IV群に大別し、II・III群は型式により細分した。II群はa類、III群はa類・b類に細分した。本稿では、縄文時代晩期前葉として大洞B・BC式、中葉として大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式、後葉として大洞A・A'式として分類を行った。精製・半精製・粗製土器の区分は、以下の通りにした。精製は装飾性が高く、あるいは緻密な調整が施される土器。粗製は調整が施されず、装飾性が乏しく日用雑器的に使用された土器。半精製はその中间的土器である。12～14・37・38は壺である。12・13・37は粗製で、14は半精製、38は精製である。34は皿で、精製である。11・15～17・19～33・35・36は鉢（台付）・浅鉢（台付）で大半が半精製である。16は精製である。39～43は台部で、39～42は半精製、43は精製である。18・44～89は深鉢・鉢で粗製である。38・43は赤色顔料が施されている。

なお、分類等の詳細は観察表に記してあり、縄文は回転方向を表している。

第I群 縄文時代後期前葉 十腰内I式（図7-1～10）

第II群 晩期前葉（図7-11～14）a類 大洞BC式（11）

第Ⅲ群 晩期中葉（図7-15～34）a類 大洞C1式（15～18）

b類 大洞C2式（19）

第Ⅳ群 晩期前中葉（図8-35～66 図9-67～93）

#### 円盤状土製品（図9-90）

1点出土した。加工前後に破損しており、不整縁円形を呈する。外面にLRを施し、内面にミガキ調整を施す。

#### ミニチュア土器（図9-91・92）

2点出土した。壺の口縁部破片と胴部破片である。外面に雑なミガキが施された粗雑な形成である。他の出土土器から縄文時代晩期と考えられる。

#### 土製耳栓（図9-93）

1点出土した。破損しているが、朝顔状の装飾が対称に付くと考えられる。表面には赤色顔料が施される。縄文時代晩期と考えられる。

（野村 信生）

#### 石器（図10-11）

遺構外から出土した石器は42点であり、AZ25グリッド、BA24グリッドに集中している。器種は石窓、スクレイパー、二次調整剥片、使用痕のある剥片、敲磨器、石皿・台石類、剥片である。石器の素材として、幅1に対し長さが2以下の幅広の剥片が用いられている。大きさは長さ40～60mmに集中している。

#### 石窓（図10-1）

1点出土した。先端部を刃部とし、形状は刃部がやや幅広の楕円形である。刃部は片面に急角度の細部調整が施された片刃で、形状は丸刃である。

#### スクレイパー（図10-2～5）

4点出土した。側縁に連続した調整を施して一定の長さの刃部をもつものである。2は厚めの端部片面に不連続な細部調整を施して刃部を作り出している。また、表面の鋭角な側縁には連続した微細剥離痕がある。3～5は側縁に連続した細部調整が施されたものである。3の表面端部には微細な剥離痕がみられる。

#### 二次調整剥片（図10-6～12）

12点出土し、6点図化した。部分的な調整のみで、一定の刃部を作出していないものである。素材の大きさは幅1に対し長さが2以下の幅広の縦長剥片が多い。6・8は側縁を部分的に調整したもので、縁辺に微細な剥離痕がみられる。

#### 使用痕のある剝片（図10-13～図11-14～20）

10点出土し、8点図化した。縁辺に使用によるものと思われる微細な剝離痕を有するものである。微細剝離痕は位置によって一側縁の片面（14・17・19）、一側縁の両面（13・15・16・18）、片面の二側縁（20）にみられるものの3種類に分類される。

#### 敲磨器（図11-21～23）

安山岩製のものが3点出土した。21は球状礫を素材とし、両面に滑らかで光沢のある明瞭な磨り面と中央に浅い凹みがみられる。22は棒状礫を素材とした磨り石で、両面と片側面に平滑な磨り面を有する。23は両面に磨り面と敲打によるやや深めの凹みが2カ所みられる。片側面は敲打により幅約5mmの平坦面となり、断面が隅丸三角形の棒状礫である。

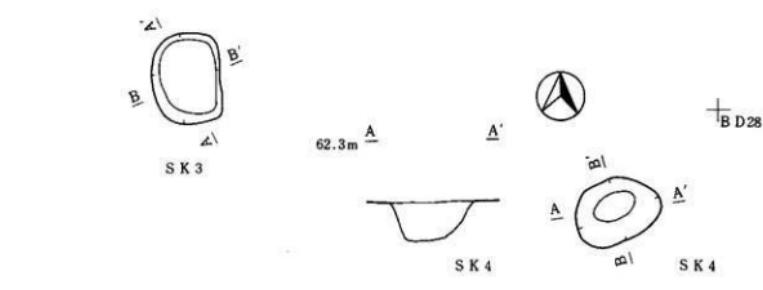
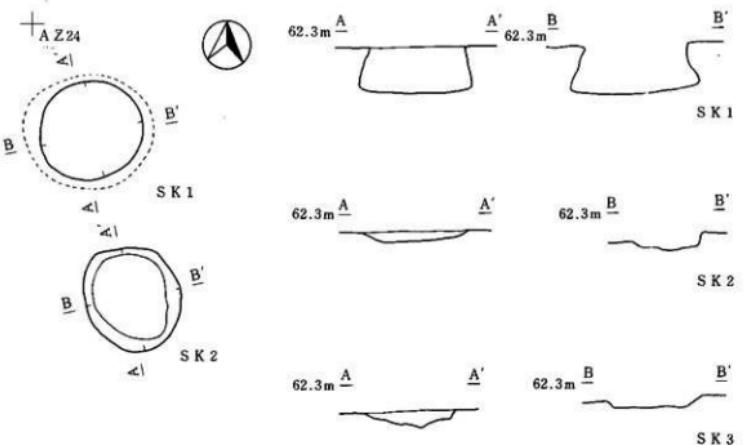
#### 石皿・台石類（図11-24）

安山岩の扁平な円礫を素材とする。磨り面はあまり明瞭ではないが、両面に広く見られる。

#### 剝片

細部調整の施されていないものが12点出土した。なかには両面の大部分が被熱によりはじけているものが1点みられる。

(杉野森 淳子)



SK-1  
1層 10YR3/3 暗褐色土 浮石中粒15% 炭化物中粒1%  
10YR4/4 暗褐色土 10%

SK-2  
1層 10YR3/3 暗褐色土 浮石粒・炭化物粒1%

SK-3  
1層 10YR3/3 暗褐色土 浮石粒1%

SK-4  
1層 10YR2/2 黒褐色土 浮石中粒5%  
10YR3/3 暗褐色土 10%

62.3m B B'

0 1 : 40 2m

図5 土坑 (SK 1~4)

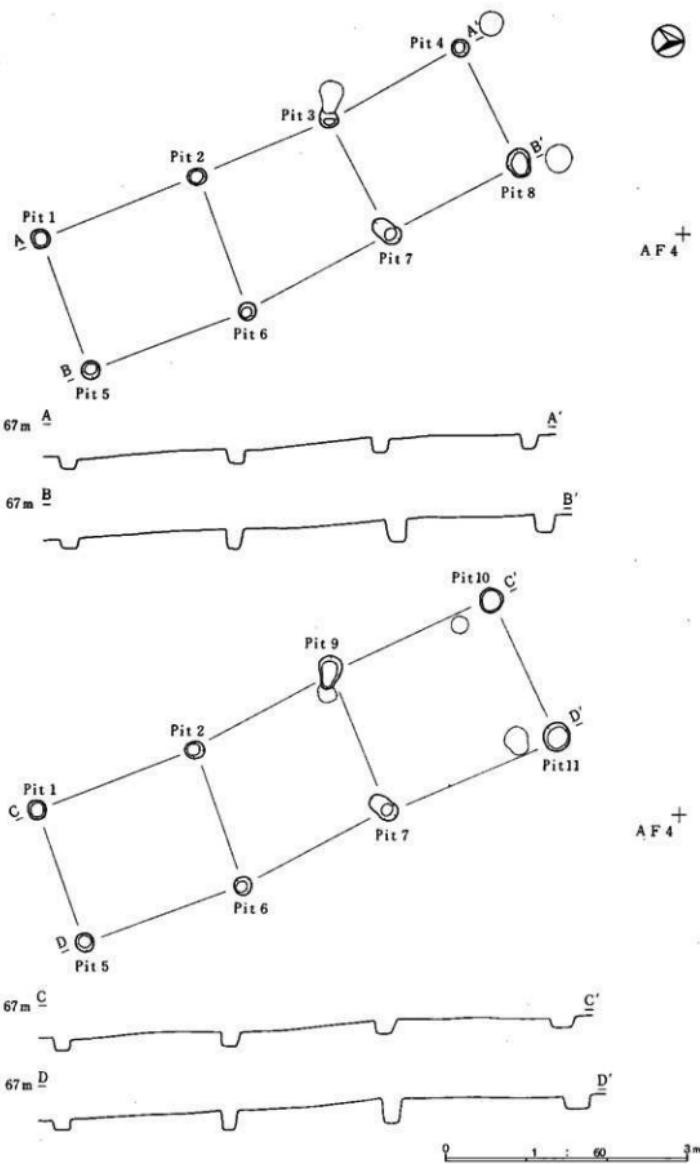


図6 第1号掘立柱建物跡

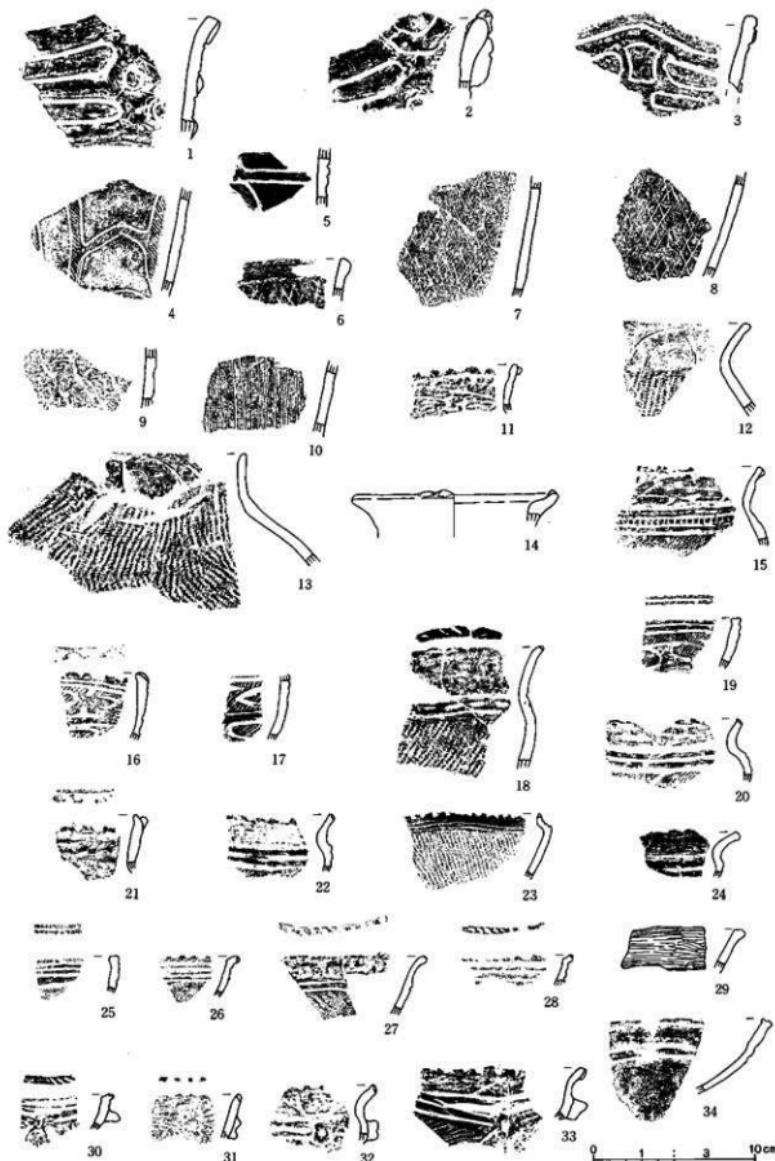


図7 造構外出土土器

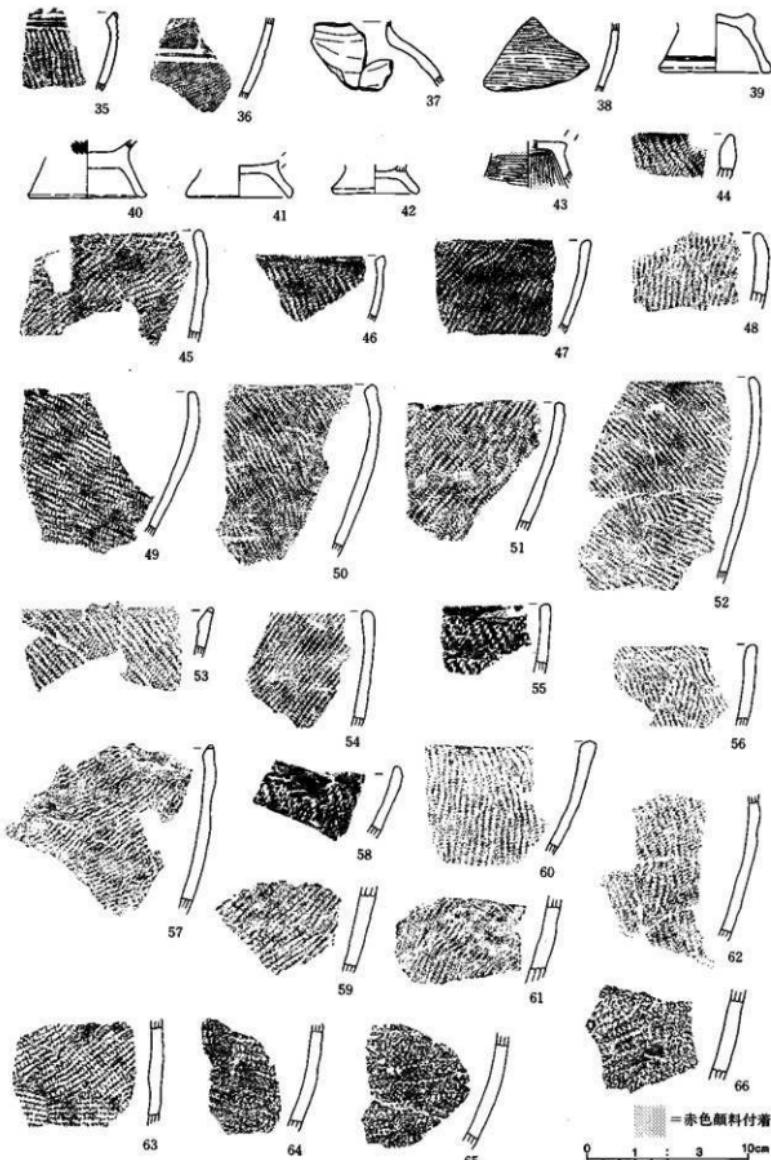


図8 造構外出土土器

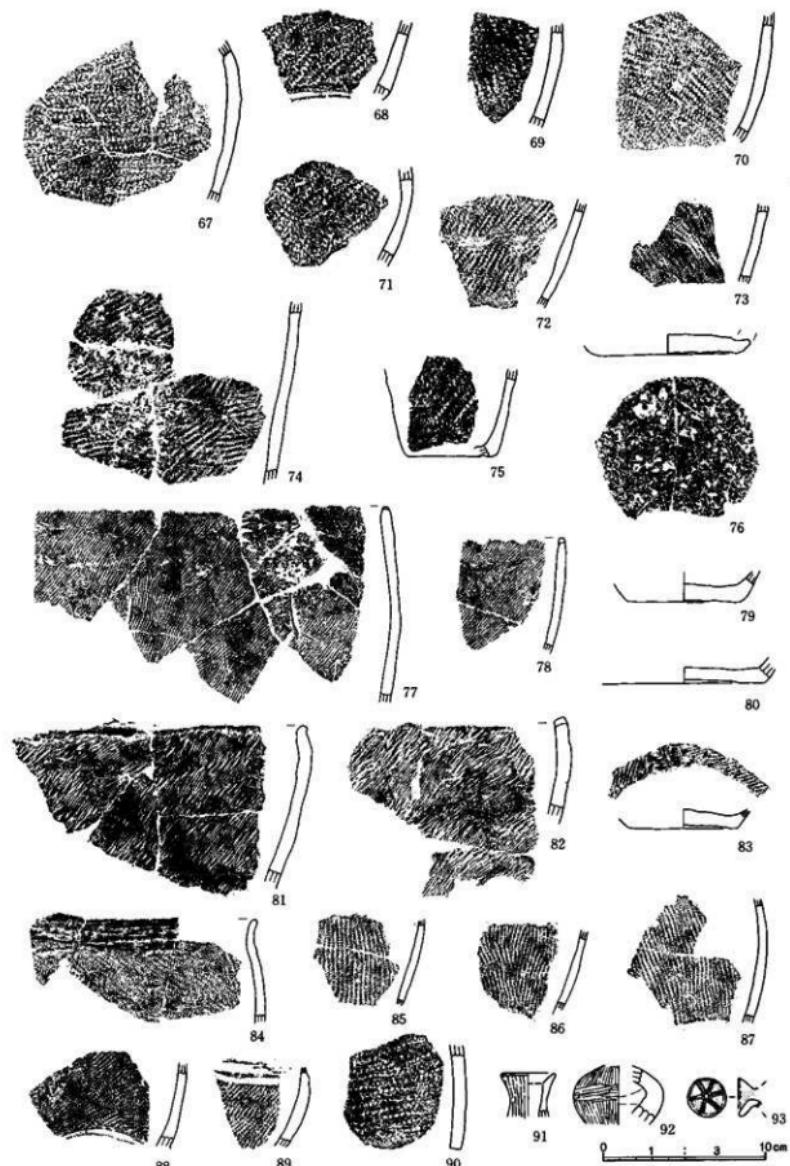


図9 造構外出土土器

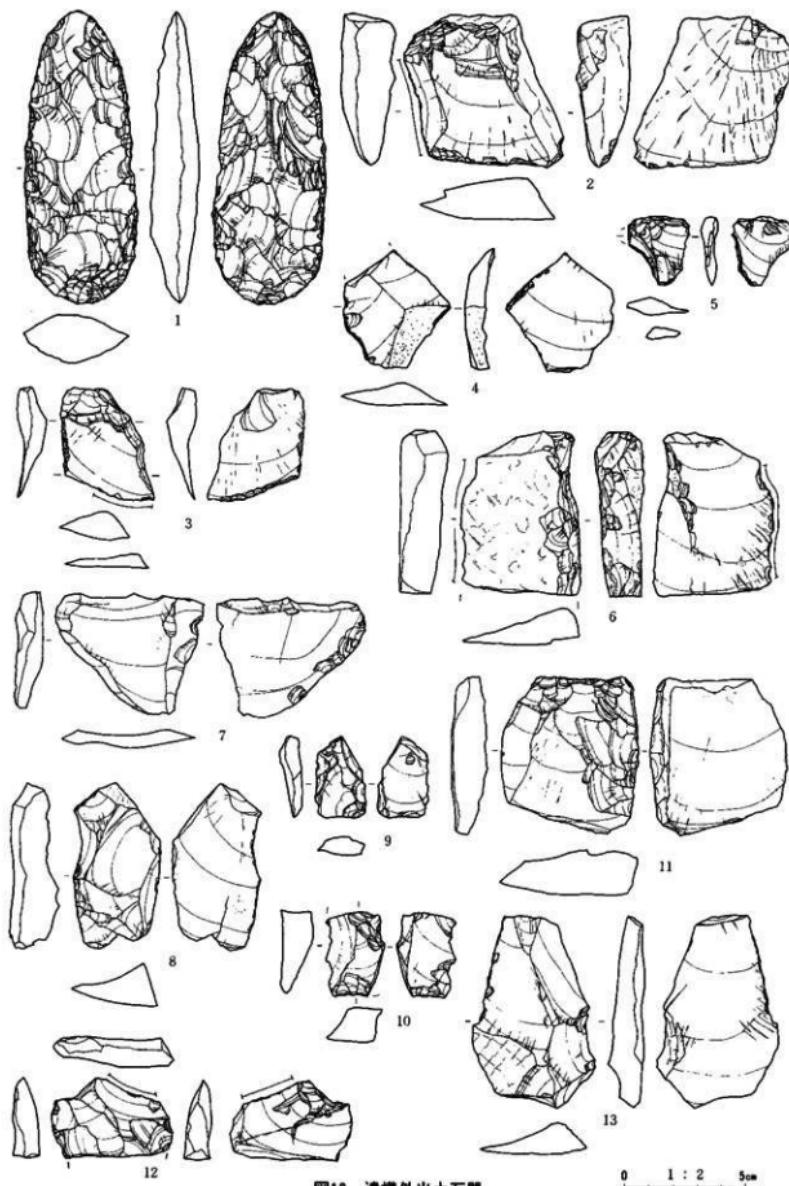


図10 遺構外出土石器

0 1 : 2 5cm

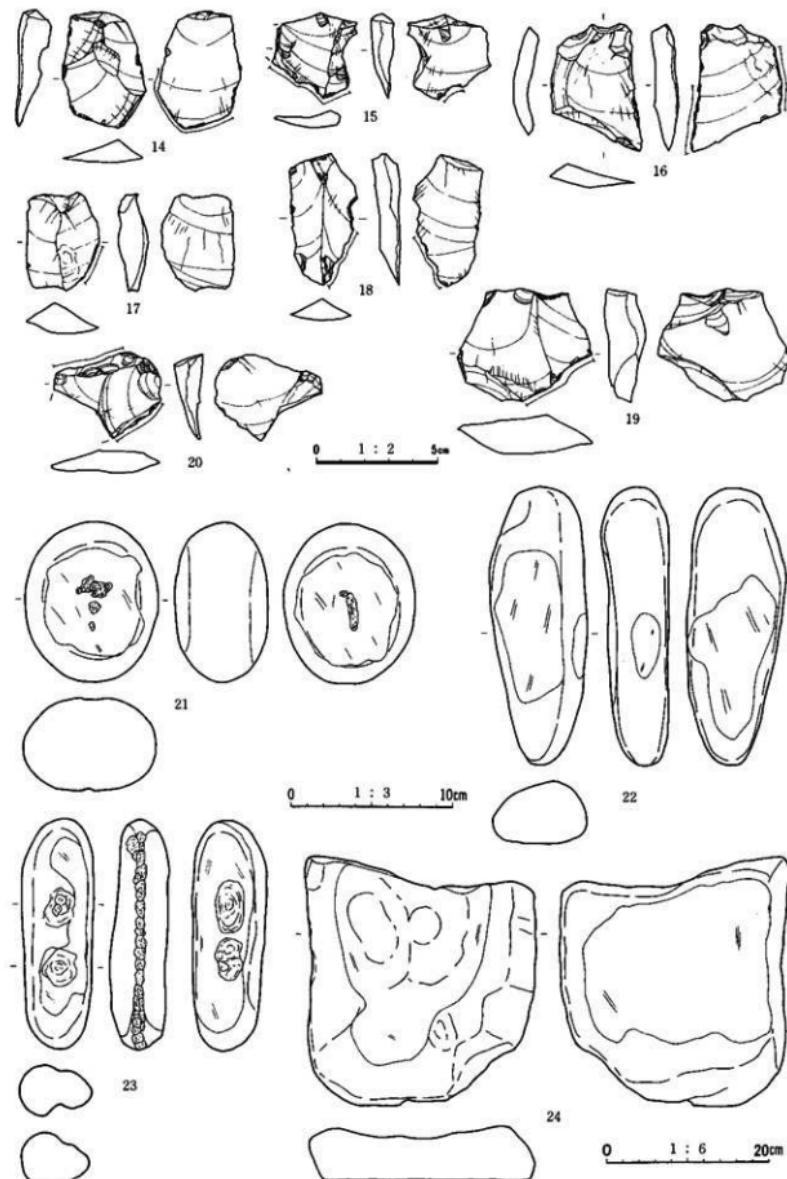


図11 遺構外出土石器

表1 造像外出土文物

表2 遺構外出土石器

図版番号	器種	地立	場位	長さ:mm	幅:mm	厚さ:mm	重さ:g	石材	備考
図10-1	石椎	A F-4	II	120.0	45.0	19.0	95.5	珪質頁岩	
2	スクレイバー	B A-24	II	62.0	66.5	21.0	80.8	珪質頁岩	微細剝離痕有り
3	スクレイバー	A Z-25	II	45.0	37.0	12.0	14.6	珪質頁岩	微細剝離痕有り
4	スクレイバー	A Y-23	II	( 49.0 )	44.0	9.0	15.6	珪質頁岩	上部欠損
5	スクレイバー	A Z-24	-	28.5	( 35.0 )	8.0	4.0	珪質頁岩	一部欠損
6	二次調整制片	A Z-25	II	( 67.0 )	49.5	19.5	64.4	頁岩	下部欠損
7	二次調整制片	A Z-24	II	48.5	61.5	65.0	21.9	珪質頁岩	
8	二次調整制片	A Z-24	-	67.0	36.0	18.5	43.5	珪質頁岩	
9	二次調整制片	B C-27	II	33.0	21.0	9.4	5.6	珪質頁岩	
10	二次調整制片	B A-24	II	( 34.0 )	( 27.0 )	13.5	11.5	珪質頁岩	上部欠損
11	二次調整制片	A Z-25	II	64.5	57.0	14.0	59.5	珪質頁岩	
12	二次調整制片	B A-24	II	( 33.0 )	50.0	10.5	18.2	珪質頁岩	下部欠損
13	使用痕のある制片	-	-	78.0	49.5	14.5	44.8	珪質頁岩	一側縫片面
図11-14	使用痕のある制片	A Y-23	II	47.0	34.0	12.4	15.2	珪質頁岩	一側縫片面
15	使用痕のある制片	B A-24	II	35.0	( 35.0 )	7.0	5.8	珪質頁岩	一側縫片面 一部欠損
16	使用痕のある制片	B A-24	II	52.0	38.0	9.5	15.1	珪質頁岩	二側縫片面
17	使用痕のある制片	B A-24	II	40.0	30.0	9.5	10.3	珪質頁岩	一側縫片面
18	使用痕のある制片	B A-22	II	54.0	28.0	11.5	10.6	珪質頁岩	一側縫片面
19	使用痕のある制片	A Y-23	II	46.5	55.5	17.5	33.8	珪質頁岩	一側縫片面
20	使用痕のある制片	A Z-25	II	( 35.5 )	( 44.0 )	10.5	11.4	珪質頁岩	二側縫片面 下部欠損
21	敲磨器	-	-	97.0	82.0	57.0	655.4	安山岩	両面・片面磨り
22	敲磨器	A Z-24	II	169.0	61.0	42.0	574.7	安山岩	両面・片面磨り
23	敲磨器	A Z-28	II	140.0	45.0	33.0	278.6	安山岩	両面磨り・凹み 傷面敲打
24	石墨・白石	A Z-25	II	296.0	280.0	65.0	9200.0	安山岩	両面磨り
	制片	A X-25	II	42.5	46.5	8.0	12.1	珪質頁岩	
	制片	A Y-23	II	29.5	47.5	11.5	12.2	珪質頁岩	
	二次調整制片	A Y-23	II	38.0	( 27.5 )	7.5	8.3	珪質頁岩	
	制片	A Z-24	-	39.5	32.0	11.5	10.9	珪質頁岩	
	制片	A Z-25	II	61.0	36.0	26.5	45.6	珪質頁岩	
	制片	A Z-25	II	27.0	35.5	8.0	6.8	珪質頁岩	
	二次調整制片	A Z-25	II	28.5	27.0	7.5	4.8	珪質頁岩	
	使用痕のある制片	A Z-25	II	40.0	31.5	12.0	9.7	珪質頁岩	
	制片	B A-24	II	29.0	( 14.0 )	3.5	0.8	珪質頁岩	
	二次調整制片	B A-24	II	30.0	( 35.0 )	8.5	6.8	珪質頁岩	
	使用痕のある制片	B A-24	II	56.5	54.0	13.5	30.7	珪質頁岩	
	制片	B A-24	II	63.5	45.0	31.5	31.8	珪質頁岩	
	制片	B A-24	II	43.0	35.0	8.0	9.1	珪質頁岩	
	制片	B B-28	II	20.5	19.0	4.0	1.3	珪質頁岩	
	二次調整制片	B C-27	II	( 14.5 )	( 20.0 )	7.5	2.2	珪質頁岩	
	制片	-	-	26.0	67.0	20.0	28.2	頁岩	
	制片	-	-	28.0	37.0	7.0	6.0	頁岩	熱によるハジケ
	制片	-	-	38.0	38.0	10.5	11.5	頁岩	

## 第4章 まとめ

今回の調査によって底田(3)遺跡から、土坑4基・掘立柱建物跡1基・柱穴2基が検出された。出土した土器は全て破片資料であり、石器は42点出土した。土器は縄文時代後期前葉・晚期前・中葉のものである。石器の出土地点が土器とはば類似していることから、土器と石器は同一時期と考えられる。土坑の周辺から縄文時代晚期の土器が出土することから、晚期の可能性が考えられる。掘立柱建物跡は十和田a火山灰降下以前に形成されていることから、10世紀初頭以前と考えられる。調査区外に遺構が広がっているかどうかについては不明である。

土器の大半は粗製・半精製土器で、精製土器は少量のみである。ミニチュア土器は2点出土した。精製土器とミニチュア土器が少量確認されたことは、双方が使用方法に何らかの関連性があることを示唆しているかもしれない。半精製・粗製土器に煮炊きの痕跡が確認できる。焼土は確認されなかつたが、遺跡内で煮炊きを行った可能性が考えられる。

石器は石鏁1点、スクレイバー4点で製品は少ない。剥片が少なく、しかも石核が確認できないことから、遺跡内での石器制作の可能性は低く、周辺から持ち込まれた可能性が高い。第1～3号土坑の周辺にまとまって出土し、遺構との関連性が伺われる。敲磨器、石皿・台石類は、半精製・粗製土器とセットとして使用された可能性があり、関連を考慮する必要がある。

今回の調査では、集落の中心的場所ではないが、人間の活動の痕跡が確認された。このような遺跡が、集落、或いは狩り場等とどのような関連性をもつかは不明であるが、今後の調査の進展により少しずつ明らかになっていくものと思われる。

(野村 信生)

### 参考文献

- |           |      |                                 |
|-----------|------|---------------------------------|
| 青森県立郷土館   | 1984 | 『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館・考古 - 第6集     |
| 青森県立郷土館   | 1997 | 『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集 |
| 天間林村教育委員会 | 1994 | 『二ツ森貝塚』天間林村文化財調査報告書第2集          |
| 天間林村教育委員会 | 1995 | 『二ツ森貝塚』天間林村文化財調査報告書第3集          |
| 天間林村教育委員会 | 1996 | 『二ツ森貝塚』天間林村文化財調査報告書第4集          |
| 天間林村教育委員会 | 1997 | 『二ツ森貝塚』天間林村文化財調査報告書第5集          |
| 天間林村教育委員会 | 1998 | 『二ツ森貝塚』天間林村文化財調査報告書第6集          |



遺跡遠景



遺跡近景



A B 6 地点土層



A Z 8 地点土層



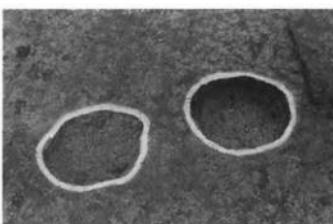
B G 12 地点土層



第 1 号插立柱建物跡



第 1 号土坑



第 1 · 2 号土坑



1



2



3



4



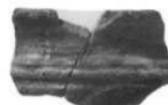
7



15



16



20



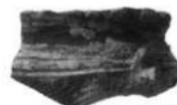
23



22



32



33

$$S = 1/2 \quad (16 + 22 + 32 = 1/1)$$

写 真 2



35



52



78



82



84



—



93

$S = 1/1$  (35 · 93)  
 $S = 1/2$  (52 · 78 · 82 · 84)



写真 4

## 報告書抄録

ふりがな	そこだかっこさんいせき							
書名	底田(3)遺跡							
副書名	東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第290集							
編著者名	野村 信生							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017 (788) 5701 FAX 017 (788) 5702							
発行年月日	2001年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そこだ いせき 底田(3)遺跡	青森県上北郡天間林村大字天間 館字底田地内	49	49039	40° 44° 15°	141° 6' 30°	19990701 ~ 19990730	3,400	東北新幹 線建設事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
底田(3)遺跡	散布地	縄文 平安	土坑 4基 掘立柱建物跡 1基 柱穴 2基	縄文土器・石器				

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第290集

## 底 田 (3) 遺 跡

－東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 2001年1月31日  
発 行 青森県教育委員会  
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印 刷 所 高金印刷株式会社  
〒038-0015 青森市千刈2丁目1-30  
TEL 017-781-0519・2244 FAX 017-781-2509

---





活彩あおもり  
—輝くあおもり新時代—